

# 健康・医療・介護・福祉ニュース

◆最新の健康・医療・介護・福祉などに関するニュースを集めて紹介します。

## 地域医療の

## 架け橋に

10

### 奈良医療センター

「小児神経科」は、神経(脳・脊髄へせきすい)・末梢(まつしょう)神経等)の病気を持っておられるお子様の、診断・治療を行う診療科です。

診療する具体的な病名としては、てんかん・脳性麻痺(まひ)・精神遅滞(発達遅れ)・発達障害(自閉症など)等です。その中で特に多い小児の「てんかん」「熱性けいれん」について、今回はお話をしたいと思います。

「てんかん」という病名は、100人に1人の割合でみられ、特に小児・高齢者の発病が多いことが知られています。

## 小児の「てんかん」「熱性けいれん」

国立病院機構奈良医療センター 澤井 康子  
小児神経科医長

妙な行動をする(等様々(さまさま)な発作症状が出現します)。

てんかんの診断では、まず、脳波検査を行い、異常な神経細胞の活動をとらえます。てんかん発作のないときには、脳波異常が目立たない方もおられますので、詳細な情報を

# 長く多い発作に注意

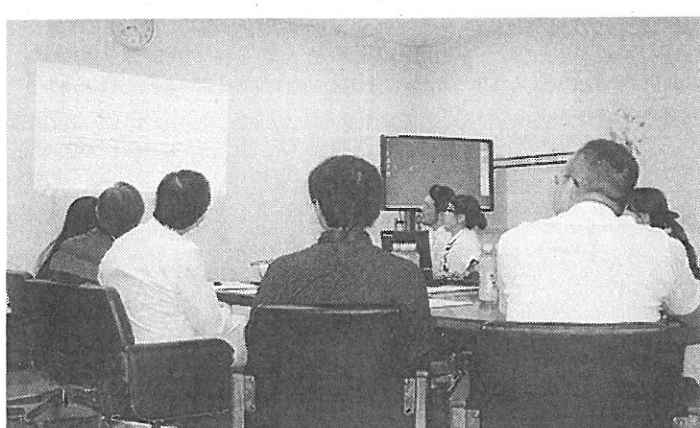
えるために、数日入院をして、長時間ビデオ脳波検査(脳波のみならず、ビデオも同時に記録します)を行うこともあります。

また、頭部MRIなどの画像検査で、てんかんの原因となるような脳の形成異常や腫瘍(しゅよう)性病変等の有無について評価します。

てんかんの分類をします。てんかんの分類により、使用する薬・治療・治りやすさは異なります。てんかんの治療は、まず、抗てんかん薬を使用します。

現在、抗てんかん薬は20種類以上あり、様々な抗てんかん薬を組み合わせて治療を行います。中には、薬ではなかなか抑制されない難治性てんかんもあり、てんかん外科手術の適応となることもあります。

【略歴】平成8年、京都府立医科大学卒業。小児科学会専門医・小児神経学会専門医・てんかん学会専門医。京都府立医科大学病院等の勤務を経て、平成27年から現職。



奈良医療センター「てんかんカンファレンス」の様子=脳波画像検査を検討し、よりよい治療に結びつけている

てんかんとよく似たものに「熱性けいれん」があります。38度以上の発熱に伴って、けいれん、または非けいれん性の発作(意識がなくなる等)を起こすもので、通常、生後6カ月〜5歳くらいの乳幼児に起こります。日本では、約7〜10%の小児で熱性けいれんがみられます。

通常の熱性けいれんは、発熱時以外に症状がみられることはありませんが、5〜6歳に成長すると、自然とみられなくなるという良好な経過をたどります。

心配のし過ぎは無用ですが、発作が長い・発作の回数が多い場合は、当院を含めた専門医療機関に相談されることをお勧めします。

次回は10月12日付掲載予定です。

独立行政法人  
国立病院機構奈良医療センター  
星田 徹院長  
電話0742 (45) 4591